中央研究院圖書館藏

山本健吉編

最新俳句歳時記

新年

文藝春秋刊

最新俳句歳時記　新年

昭和四十七年一月　五　日　第一刷
昭和五十二年四月二十五日　第七刷

編著者　山本健吉

発行者　樫原雅春

発行所　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号一〇二

印刷　精興社
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函

万一落丁乱丁の時はおとりかえいたします

© KENKICHI YAMAMOTO　Printed in Japan

編纂の方針

一、本書は春の部・夏の部・秋の部・冬の部・新年の部の五冊をもって完結する。

一、四季各冊は、従来の時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物という分類法、あるいはそれに類似の分類法を廃し、三月にわたるものと初・仲・晩との四部門に分けた。それは従来の分類法における初春の季語と晩春の季語とを、無差別に春の季題として並列するような曖昧さを避けたかったからである。ただし、二月にわたるものは、それぞれの場合の判断に従った。

一、季語の分類は次の原則による。

春　立春（二月四日）から立夏の前日（五月五日）まで
夏　立夏（五月六日）から立秋の前日（八月七日）まで
秋　立秋（八月八日）から立冬の前日（十一月六日）まで
冬　立冬（十一月七日）から立春の前日（二月三日）まで

この原則を立てることによって、本書では、たとえば「メーデー」（五月一日）と「八十八夜」（五月二、三日）とは、ともに晩春の季語となる。従来の歳時記は、「メーデー」を夏とし、「八十八夜」を春とするような愚かしい分類をやっていたのである。ただし「子供の日」（五月五日）は、端午の関係から初夏に分類しておいた。

一、各季の初・仲・晩の分類は、つぎの原則に従った。

初春（陽二月・陰一月）　立春（二月四日）から
　啓蟄の前日（三月五日）まで
仲春（陽三月・陰二月）　啓蟄（三月六日）から
　清明の前日（四月四日）まで
晩春（陽四月・陰三月）　清明（四月五日）から
　立夏の前日（五月五日）まで

初夏（陽五月・陰四月）　立夏（五月六日）から
芒種の前日（六月五日）まで
仲夏（陽六月・陰五月）　芒種（六月六日）から
小暑の前日（七月六日）まで
晩夏（陽七月・陰六月）　小暑（七月七日）から
立秋の前日（八月七日）まで
初秋（陽八月・陰七月）　立秋（八月八日）から
白露の前日（九月七日）まで
仲秋（陽九月・陰八月）　白露（九月八日）から
寒露の前日（十月七日）まで
晩秋（陽十月・陰九月）　寒露（十月八日）から
立冬の前日（十一月六日）まで
初冬（陽十一月・陰十月）　立冬（十一月七日）から
大雪の前日（十二月六日）まで
仲冬（陽十二月・陰十一月）　大雪（十二月七日）から
小寒の前日（一月四日）まで
晩冬（陽一月・陰十二月）　小寒（一月五日）から
立春の前日（二月三日）まで

ただし季節と年時とは正確に一致するわけではない。たとえば、「メーデー」が五月の行事であるのに晩春に分類されたり、「文化の日」が十一月の行事であるのに晩秋に分類されたりしているのは、それらがそれぞれ、立夏・立冬以前の行事だからである。

一、地方によって、陽暦で行なわれたり、陰暦（または月遅れ）で行なわれている行事は、分類上もっとも頭を悩ます問題である。たとえば「七夕」「盂蘭盆」などは、東京では盛夏の季感を持つが、京阪地方はじめ多くの地方では昔どおりの初秋の季感を持つ。本書では、それらは地方生活の上での季感の滲透度の深さと、伝統的に担っている行事の意味とを考えて初秋の部に入れた。同様の考えから、「雛祭」は晩春、「端午」は仲夏に入れた。そのため、「雛祭」と「桃の花」、「端午」と「菖蒲」、「七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夕」と「天の川」などが、別の季に分類されるという不合理は消滅する。ただし、灌仏（仏生会・花祭）は、東北地方などを除いて全国的に陽春四月の行事と化してしまった大勢に抗しがたく、古来卯月八日の行事として初夏の季を持っていたのを、今は桜花のさかりの行事として晩春の季に置かざるをえなかったのである。

一、新年の部を独立させたのは、都会地の大部分は新暦に従いながら、農村では依然として旧正月をやっていることから、新年行事を冬の部に入れても春の部に入れても、不合理なことが起るからである。たとえば、農村だけでしか行なわれない新年行事を、冬の部に入れることもできないし、都会で主として行なわれる新年行事を、春の部に入れるのも変である。だがその双方とも、新年季題として並列されることは、不自然ではない。そのことが、新年の部を独立させた最大の理由である。同様の理由で、冬の部には初・仲・晩のほかに、歳末の項を設けた。そこには明らかに歳末の意味を帯びた、たとえば「煤払」「年の市」「餅搗」「除夜」などの季語だけを集め、従ってそれは地域によってあるいは新暦十二月（仲冬）、あるいは旧暦十二月（晩冬）に行なわれる行事なのである。

一、三月にわたるものと初・仲・晩の四部門では、おおよそ時節・気象・暦日・山野・園芸・水沢・海洋・田園・行事・飲食・遊戯・雑などに分類したが、これは読者の検索の便をはかったもので、それらの項目は本文でなく、各ページの柱に示した。

一、「田植時」「菫野」「罌粟若葉」「芍薬の芽」「鶯の巣」などといったものは、季題として独立させる必要がなく、それぞれ「田植」「菫」「草若葉」「草の芽」「鳥の巣」などの季題に、傍題として含めておけば十分である。その点から、従来の歳時記に見られた季題の乱立を、できるだけ統合し集中する方針を立てたが、その原理を無制限に適用したわけではない。たとえば、「花」と「花見」、「月」と「月見」、「稲」と「稲刈」、「鷹」と「鷹狩」、「蝶」と「初蝶」などは、それぞれを独立した季題と

して立てている。要はそれらが独立季題（または季語）として堪える重さを持っているかどうかにかかっている。

一、季題・季語は一、二の例外はあるが、日本本土の季節現象を選んだ。また、現在すでにうち絶えた行事の多くは、廃題として整理した。もっとも作句例がこれまでも現在でも見られる「絵踏」「寒食」「曲水」「薬喰」などの季題は、残しておいた。「亀鳴く」「蚯蚓鳴く」「獺魚を祭る」などの空想的季題も、作句されているかぎり残した。

一、山・野・川・池・沼・湖・海・潮・波・水・田・畑などの地理上の名目、あるいは暁・朝・昼・夕・宵・夜などの時間上の名目に、四季の言葉を冠して、「春の水」「秋の朝」などの季題がやたらに立てられているが、これも季題として妥当と思われるもの、例句が数多く作られているものだけに整理した。「春の水」が季題として妥当性を持っているからといって、「夏の水」「秋の水」などが、すべて妥当であるという理由にはならない。また「春の日」「秋の日」などは、従来分類上の必要から、時候と天文とに重出しているが、本書ではその必要を認めなかった。また二十四気は暦の上で、季節の移り変りのポイントをなすものだから、すべて季題として採用したが、七十二候になると、あまりにこまかく区分され、日本の季節の実情にそぐわない面もあるので、少数（たとえば「魚氷に上る」「獺魚を祭る」など）を除いて、採用しなかった。だが、新年の部の付録に、二十四節気、七十二候表をつけた。

一、年中行事は生活に関係の深いものに重点を置き、神社の祭礼などは、古来著名のもの、印象の強いものに重点を置いた。忌日は、現実に修忌のことがあるもの（利休忌・蓮如忌・大石忌など）を主とし、それにたとえ特定の行事が行なわれていなくても、季題としての趣きの深いもの（業平忌・西行忌・蟬丸忌など）を加えた。忌日は、歳時記では無制限に膨張しうる部分であって、「チェーホフ忌」「ニーチェ忌」にまで及べば、古今東西の有名人の忌日はすべて包含しなければならなくなる。そのような煩雑さは、本書では取らなかった。ただし、そのかわ

りに、新年の部の付録に、著名な人の「忌日表」をつけることにした。

一、解説は平易・簡潔・正確をむねとした。作句者の便宜をも顧慮して、季題の左側に歴史的かなづかいをルビで示した。ただし漢字の音は、これを除く。たとえば「光悦忌」はとくに左側に「くわうえつき」と示さない。

一、解説の文のなかに、ゴシック活字で示したものは傍題ならびに異名・種類である。傍題・異名・種類はできるだけ多くを網羅した。〔参照〕として示したものは、その季題と関連を持つ他の季題を示したものである。

一、例句は古句より現代にわたり、ことに現代のものを多く挙げた。採用標準は、例句として妥当なものであることを原則とし、またできるだけ多くの流派の句にわたることを心がけた。だが適当な例句が見つからなかった場合、かならずしもこの標準に厳密に従ったとは言えないものもある。例句は原作を尊重して、新かなづかいによらなかった。例句のない季題・季語も、当然例句が現われるべきことを予期して、あえて掲げた。

一、各巻に、目次のほかに、五十音順の索引をつけたが、新年の部には、全巻にわたっての季題ならびに主要な傍題・異名の総索引をつけた。

目次

編纂の方針……一
新年……二
二十四節氣・七十二候表……一三
忌日表……一四
歳時記について……一七
その一　歳時記の歴史と季題・季語……一七
その二　日本文學と季節感……一九
その三　芭蕉の季題觀……二〇
その四　季の詞……二三
その五　季語の年輪……二五
季題・季語表……二三
總索引……三一九
あとがき……三九五

新年

時節
新年……三
正月……一三
初春……一四
今年……一五
去年……一五
初景色……一六

氣象
淑氣……一六
初茜……一六
初東雲……一七
初明り……一七
初日……一七
初空……一八
初晴……一九
初霞……一九
初東風……二〇
初凪……二〇
御降……二一

山野
初富士……二一
初筑波……二二
初比叡……二二
初淺間……二三
初雀……二三
初鴉……二三
初鶏……二四
初聲……二五
初松籟……二五

行事
元日……二五

元朝……二六
年男……二七
若水……二六
初手水……二六
福沸……二九
若潮……二九
四方拜……二九
朝賀……二九
初詣……二九
初伊勢……二九
初神樂……二九
白朮詣……二八
惠方詣……二八
庭竈……二八
初勤行……二八
初彌撒……二八
繞道祭……二八
年始……二八
年玉……二八
俎始……二八
初竈……二七
初便り……二七
初暦……二七
初刷……二七
日記初……二七
寢正月……二七
二日……二七
初夢……二七
寶船……二七
白起し……二七
初荷……二七
初商……二七
買初……二四
手斧始……二四
船起し……二四
樵初……二四
初漁……二四
織初……二四
縫初……二四
書初……二四
讀初……二四
掃初……二四
初湯……二四
著衣始……二四
三日……二四
齒固……二四
玉せせり……二四
三ガ日……二四
四日……二四
棚探し……二四
御用始……二四
帳綴……二四
女禮者……二四
五日……二四
新年會……二四
初水天宮……二四
馬騎初……二四
六日……二四
六日年越……二四
出初……二四
松納……二四
飾納……二四
鳥總松……二四
若菜摘……二四

七種爪……三
七日……三
七種……三
齊……三
御行……三
佛の座……三
弓始……三
鶯替……三
松の内……三
注連貰……三
七福神詣……三
松過……三
餅間……三
初藥師……三
西宮の居籠……三
十日戎……三
寶惠駕……三
初市……三
初金毘羅……三
小松引……三
初寅……三
卯杖……三
初卯……三
初辰……三
初辨天……三
初亥……三
鏡開……三
年卸……三
藏開……三
鍬初……三
初肥……三
綯初……三
常陸帶……三
難追の神事……三
十四日年越……三
土龍打……三
雪祭……三
ほとほと……三
なまはげ……三
會陽……三
小正月……三
上元……三
成人の日……三
奈良の山燒……三
小豆粥……三
粥杖……三
皐月祝……三
成木責……三
餅花……三
削掛……三
初聖天……三
左義長……三
ちやっきらこ……三
鳥追……三
かまくら……三
えんぶり……三
綱引……三
花の內……三
藪入……三
初閻魔……三
紅葉祭……三
初觀音……三
二十日正月……三
初大師……三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

初天神……八七
初不動……八七
初甲子……八八
初庚申……八八
歌會始……八八
初春狂言……八九
初場所……八九
水祝……八九
初三十日……八九
住衣
門松……八九
藁盒子……八九
福藁……八九
年薦……八九
年木……八九
幸木……八九
鬼打木……八九
年棚……八九
蓬莱……八九
鏡餅……八九
注連飾……八九
飾海老……八九
伊勢海老……八九
野老飾る……八九
橙飾る……八九
橘飾る……八九
串柿飾る……八九
榧飾る……八九
昆布飾る……一〇〇
搗栗飾る……一〇〇
梅干飾る……一〇〇
飾炭……一〇〇
飾米……一〇〇
飾臼……一〇〇
齒朶……一〇一
楪……一〇一
穂俵……一〇一
福壽草……一〇一
春著……一〇一
萬歲……一〇二
春駒……一〇四
大黑廻し……一〇四
若夷……一〇五
猿廻し……一〇五
獅子舞……一〇六
鳥追大夫……一〇七
傀儡師……一〇七
懸想文賣……一〇八
飲食
屠蘇……一〇九
年酒……一〇九
福茶……一一〇
年の餅……一一〇
雑煮……一一一
太箸……一一一
積……一一一
喰……一一一
數の子……一一三
ごまめ……一一三
押鮎……一一四
海鼠の身……一一四
螺……一一四
肴……一一四
小鯖の粟漬……一一四

結昆布……一二四
芋頭……一二五
開牛蒡……一二五
開豆……一二五
草石蠶……一二五
阿茶羅漬……一二五
茄煎……一二六
切山椒……一二六
勅題菓子……一二六

芸能・遊戯

能始……一二六
謡初……一二六
舞初……一二七
打初……一二七
弾初……一二七
籤初……一二八
釜……一二八
初鞠……一二八
稽古始……一二九
初席……一二九
初句會……一二九
羽子板……一二九
手毬……一三一
毬打……一三一
ぶりぶり……一三一
獨樂……一三一
穴一……一三一
歌留多……一三一
雙六……一三四
十六むさし……一三五
福引……一三五
寶引……一三六
福笑い……一三六
ぽつぺん……一三六
初音寶……一三七
破魔弓……一三七
雑鏡……一三八
初結……一三八
初炙……一三九
笑初……一三九
泣初……一三九
ひめ始……一三〇
初旅……一三〇
嫁が君……一三〇

新(しん)年(ねん)

新年

年の始を言う。あらたまの年の「あらたまの」は枕詞であるが、新年の意に用いる。新しき年・改まる年・迎うる年・年明く・年立つ・年立ちかえる・年変る・年の端・年の花・年頭・初年・新歳・改年・甫年・年始・年初。〔参照〕初春。

似合しや新年古き米五升　芭蕉
年立つや家中の礼は星月夜　其角
年立つやもとの愚が又愚にかへる　一茶
新年の棺に逢ひぬ夜中頃　子規

昨夜より鎌倉雪ノ下の旅館にあり。偶々新婦を携へたる内藤湖南の室を異にして同宿せるを知り、戯れに句を送る。

先づ女房の顔を見て年改まる　虚子

元旦枕上

我家の水音に年新たなり　露月
男子(をのこ)われ老なほあさき年迎ふ　麦南
新年の山重なりて雪ばかり　犀星
県北の年立ち還る鴉かな　極浦
わたつみも綾なして年改まる　月笠
オリオンの盾新しき年に入る　多佳子
年頭の燈台白しと報(つ)げやらむ　草田男
新年の病臥の幾日既に過ぎ　誓子
年新し狂院鉄の門ひらき　三鬼
年あたらし炭の火となる音にゐて　脩
年新たな凍み足袋裏を堅くせり　節子
犬の鼻大いにひかり年立ちぬ　楸邨
ひとの家に雨蕭々と年立てり　波郷
一輪の霜の薔薇より年明くる　秋桜子
年あけぬネオンサインのなきがらに　鳳作
雪に音楽雪に稲妻年始まる　知世子
ひそかなる枯菊に年改る　たかし

枯萱に年かはりたる日がさせり　敏郎

正月（しょうがつ）　一月の称であるが、年頭慶祝の意を含めて三ヵ日ないし松の内にとくに正月の感じは深く、七日までを**本正月**（ほんしょうがつ）・**大正月**（おおしょうがつ）などと呼ぶ地方もある。また十五日・二十日、あるいは二十五日を正月祝いの終とする地方もある。収穫と播種との中間に当り、太陽が南行の極から北行に転じようとする境目に穀霊の復活を祈り、豊かな稔りを期待する儀礼行事として始まったのであろう。十五日を中心とする小正月が農耕儀礼の予祝的分子が中心になっているのに対して、大正月は年神を迎えての霊魂の更新に重点があったので、シナの風に習った公的性格をもち、国民的儀礼としての意味がつよい。**お正月**。〔参照〕一月・睦月・七日正月・小正月・二十日正月・旧正月。

正月も美濃と近江や閏月　芭蕉
正月の顔に成りけり小職人　樗良
正月や皮足袋白き鍛冶の弟子　闌更
正月の子供に成つて見たきかな　一茶
正月やよき旅をして梅を見る　碧梧桐
正月や宵寝の町を風のこゑ　荷風
正月の雨夜の客につぐ火かな　春草
正月やはしらわさびに酒の味　碧童
正月や刈らずの髪に福頭巾　寸七翁
正月やものゝをしへに数へ歌　羊我
玄関に小き炬燵やお正月　虚吼
正月や浜の茨の返り咲き　亜浪
正月の足袋白うして母在はす　碧雲居
正月の太陽褓褓（ひっつき）もて翳る　誓子
祖母恋し正月の海帆掛船　草田男
正月の髷一高を出で来たる　波郷
正月や袂振りゆく麦畑　梅の門
大粒の雨正月の闇うがつ　源義
正月や夜の食器は灯の下に　綾子

正月や木曾には木曾の手まり唄　美津夫

初春（はつはる）

陰暦正月は春の初めであるから初春と言うが、正月の意味に転用して、厳冬の陽暦一月にも用いている。**新春（しんしゅん）・迎春（げいしゅん）・明の春・今朝の春・千代の春・御代の春・四方の春・今日の春・国の春・君の春・庵の春・家の春・宿の春・門の春・老の春・おらが春。**その他新年の意味で用いる言葉は多い。

〔参照〕初春（しょしゅん）。

誰やらが形に似たり今朝の春　芭蕉
薦を着て誰人います花の春　同
兎角して旅の夜明ぞ花の春　言水
鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春　其角
のさばつて肱を曲げたり宿の春　越人
袖口に日の色うれし今朝の春　樗良
素袍着た酢売り出でこよ花の春　召波
名の高き遊女聞へず御代の春　栄阿
かつらぎの紙子脱がばや明の春　蕪村
褞袍（どてら）著て孫と餅食ふおらが春　一茶
初春や思ふ事なき懐手　紅葉
酒もすき餅もすきなり今朝の春　虚子
何の木か梢揃へけり明の春　水巴
日の春や仰げばありし古庇　春草
茶の花に尚初春の日和かな　青畝
初春の二時うつ島の旅館かな　茅舎
女人の香亦めでたしや老の春　蛇笏
遠巌に波もなかりき今朝の春　友二
迎春や油の氷る壜の中　碧童
こけし古り埴輪あたらし年の春　羽公
新春向きのネクタイは結んで見せる　秋を
炭斗に炭も満ちたり宿の春　たかし

京大俳句世に出づ

新春の人立つ書肆（しょし）に今日も来る　静塔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com